

若きニーチェの芸術観（一）

舟越 清

一、序

一八七九年ニーチェはバーゼル大学古典文献学教授の職を辞して、自由な思想家としての生活に入るが、その時期までのニーチェの作品群のなかで芸術を主要テーマにした作品としては、主として『悲劇の誕生』(Die Geburt der Tragödie, 一八七二年)と『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』(Richard Wagner in Bayreuth, 一八七六年)をあげることができる。共にヴァーグナーの芸術を取り扱

っている点では両作品は共通しているが、『悲劇の誕生』では古代ギリシャ悲劇がメイン・テーマとして論じられ、それと関連させてヴァーグナーの芸術が取り扱われているところに、特色がある。例えば、『悲劇の誕生』の中でニーチェはヴァーグナーの代表作のひとつである『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde, 一八五九年)を古代ギリシャ悲劇に対するニーチェ固有の把握を通して次のように解釈している。

『形象、概念、倫理的な教え、共感によって生ずる興奮という巨大な力でアポロンのもの、人間を自

らに内在する狂騒乱舞による自己放棄の状態から強引に引っぱり上げて人間に錯覚を与え、このディオニュソスの事象の普遍性を忘却させて、自らは、例えば、トリスタンとイゾルデという唯一の世界像を見ていて、それをより一層良く、より一層内面的に見るには、音楽の力を借りるより外にないのだ、という妄想に誘うのである。」

アポローンの世界とディオニュソスの世界を対概念にして古代ギリシャの文化を把握する仕方は、ニーチェに特徴的なことであるが、そうした把握の仕方をニーチェはヴァーグナーの代表作のひとつである『トリスタンとイゾルデ』にも行なっている。「トリスタンとイゾルデという唯一の世界像」というアポローンの世界で開花した芸術に底知れない深さと生気を与えているものこそ、ディオニュソスの世界に属する「音楽の力」にほかならない、とニーチェは見ている。『トリスタンとイゾルデ』にニーチェは古代ギリシャ悲劇の再来を見ていたのである。

これに対して『バイロイトにおけるリヒャルト・ワーグナー』では古代ギリシャの劇芸術に関する論述は表舞台

から姿を消し、ヴァーグナーとヴァーグナーの芸術作品が全篇に論じられ、それとの関係でところどころに古代ギリシャ悲劇が現われていると言ったぐあいである。例えば、同じ『トリスタンとイゾルデ』をニーチェは『バイロイトにおけるリヒャルト・ワーグナー』の中で次のように記している。

「これ（『トリスタンとイゾルデ』）はあらゆる芸術の中で最も芸術という名にふさわしい形而上学的な作品であり、悪となり、虚偽となり、分離したものとなって、恐ろしく薄気味悪いほどの朝の明るさの中で鮮明に輝いている生とはおよそ縁のない、夜と死の秘密に貪婪にも無上に甘美にあこがれながら、死んで行く人が持つ失意の眼差しを漂わせた作品である。しかも、厳正極まる形式のドラマであり、圧倒的に素朴な偉大さにつまれた作品であり、まさしくそれ故にこそ、肉体は生きているのに死んでいるとか、身は二つでありながら一体であるといった、神秘にふさわしい作品になっ（こ）っている。」

ここにはもはや古代ギリシャに関する記述はどこにもない。あるのは『トリスタンとイゾルデ』に対するニーチェの把握の表現であるが、詳細に見ると、「鮮明に輝いている生」とその生とは無縁な暗い「夜と死の秘密」にアポロンの世界とディオニュソスの世界が秘められているのに気が付く。そのように、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』ではヴァーグナーの芸術を主として論じており、そのヴァーグナー芸術の論述に古代ギリシャ文化に対するニーチェの把握がところどころに陰に陽に現われている。見方によつては現実のヴァーグナー芸術を論じたものではなく、ニーチェが理想とした芸術をヴァーグナーを通して述べたとも思えるのである。実際、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』を注意して読むと、そこここにヴァーグナー批判かと思える個所が織り込められているのが認められる。例えばである。

「ところで、ヴァーグナーの生涯には幼年時代と青年時代という、劇的人生以前とも言うべき部分があった。そして、この部分に目を向けると、どうしてもひとつの謎に突き当たる。彼自身はまだこの段階ではヴ

ァーグナーの未来を予告しているとは思われないのだが、今振り返ってみると、先触れとして、あるいは、見誤まるかもしれないものが、仔細に見れば、希望というよりもむしろ危惧の念を生ぜずにはおかぬさまざまな性質が並存しているように見える。つまり、その性質とは、落着きがなく興奮しやすい精神であり、諸事万端ものを理解するのに神経質でせっかちになる氣質とか、ほとんど病的なまで張りつめた気分を激しく愛好する気分とか、つい今まではなほ心の充ち足りた平靜な心の状態から突然人が変つたように横暴にふるまい、わめき散らす状態に急変したりすることである。³⁾」

ニーチェはここでヴァーグナーの幼年時代や青年時代とことわっているが、ここで描写されているヴァーグナーの心的傾向は、ニーチェ自身がトリップシェン時代に味あわされた体験にほかならない。

ニーチェは一八七四年の初めに資金難でヴァーグナーのバイロイト祝祭劇場建設事業の流産を伝える知らせを受けた時、ヴァーグナーに関する批判をノートに書き留めてい

る。例えば『ヴァーグナー』は生まれながらの俳優だ。しかし、いわばゲーテと同様に画家の腕のない画家だ。彼の才能は逃げ道を探し見つける。ところでこの望みを断たれた衝動がひとつになって作用するのを考えてみよ！」⁽⁴⁾と言ったぐあいである。『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』は文字通りには受け取れない。

『悲劇の誕生』はニーチェ二八歳の作品である。ニーチェはすでにバーゼル大学古典文献学教授として古代ギリシヤに対する並々ならぬ自負を持っており、また、リヒャルト・ヴァーグナーとの交友を通してヴァーグナーに対して親近感を持ち、また、新鮮なイメージを抱いていた頃であった。この頃のニーチェはヴァーグナーの表の顔しか見えなかったとも言える。それだけに、ニーチェの芸術観が『悲劇の誕生』には古代ギリシャ文化に対するニーチェ固有の把握にヴァーグナーの芸術を投影させる形で表出されていると言える。

それに対し、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』は一八七六年の作品であり、スイスのルツェルン郊外のトリーフシエンに一八七二年にヴァーグナー家を二十三回目のスイスでの最後の訪問をしてから四年を経た作

品であり、一八七四年から一八七六年まで、さまざまな事情があったとは言え、一回もニーチェはヴァーグナーに会っていない。一八七二年から一八七六年の間にニーチェのヴァーグナー観は徐々に変化し、距離を置いてヴァーグナーを見るようになっていた。一八七六年七月に『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』を出版し、ヴァーグナーに献本しているが、同年七月に第一回バイロイト祝祭劇場におけるこけら落とし出席の為、バイロイトに赴き、『ニーベルングの指環』(Der Ring des Nibelungen, 一八七四年) 総試演に出席したが、いろいろな理由から途中から逃げ出し、バイエルンの森のクリンゲンブルンに去ってしまった。そして、一八七八年『人間的な、あまりに人間的な——自由精神の為の書』(Menschliches, Allzumenschliches, Ein Buch für freie Geister) を出版し、ヴァーグナーから『パルジファル』(Parsifal, 一八八二年) のスコアを贈られた返礼にこの書をヴァーグナーに贈って、両者の交友関係は運命的な終焉を迎えるのであった。

こうした経緯をふまえてみると、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』は一見、ヴァーグナーの芸術を賛美しているように見えるが、その賛美の論述の陰にヴ

ヴァーグナーを客観的に見るニーチェの目に映じたヴァーグナー像がそこに散りばめられている。ヴァーグナー熱から冷めたニーチェが、当時最大の芸術家の一人であったヴァーグナーを通して自らの芸術観を述べた作品とも言える。そういう意味で『悲劇の誕生』をニーチェの芸術観の率直な表現とすれば、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』は、ヴァーグナーを通してニーチェが四年を費やして完成した芸術論の結晶とも言える。敢えて言うなら、ヴァーグナーという十九世紀の転換期における最大の芸術家を通してその時代の芸術一般を論じた書とも言えるのである。『悲劇の誕生』と『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』とは若きニーチェの芸術観を構成する二大要素と言える。こうしたことを前提にして、ここではこのほかに『ギリシャの音楽劇』や『ソクラテスと悲劇』など、一八七八年頃までの諸作品を取りあげながら、若きニーチェの芸術観を見ることにする。芸術論に入る前に一八七九年までのニーチェとヴァーグナーの間に展開された交友関係をたどることにする。

二、ニーチェとヴァーグナー

前項で述べた『悲劇の誕生』と『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』の関係は、一八六八年ニーチェが個人的にヴァーグナーと親しく知るようになって以来、両者の関係が破局に至るまでのヴァーグナーに対するニーチェの体験の変遷からも跡付けることができる。

(一) ヴァーグナーとの邂逅からトリブシエン時代まで

ニーチェの生涯でリヒャルト・ヴァーグナーの名が記されたのは、一八六一年一月五日にニーチェが進学したプロルタ学院から母親のフランツィスカと妹のエリーザベトにあてた手紙の中である。当時、ニーチェは十七歳に過ぎなかったが、その手紙の中で「ところで僕はもうひとつほしいものがあります。それははつらつとした有名な男性のプロマイド、例えば、(フランツ)リストとか(リヒャルト)ヴァーグナーという人のプロマイドです」と記している⁽⁵⁾。その後プロルタ学院時代にヴァーグナーの『トリスタン

と『イゾルデ』の楽譜を購入したり（一八六二年）、『タンホイザー』や『ヴァルキューレ』のピアノ曲の楽譜を買って複雑な気持ちでピアノを弾いてみたり（一八六六年）、一八六八年の一〇月二八日に『トリスタンとイゾルデ』の前奏曲や『ニルンベルグのマイスタージンガー』の序曲を聞いて完全にヴァーグナーファンになっている。同日付けの親友、エルヴィン・ローデあての手紙には「このような音楽に批判的に冷静に対処することには耐えられません。あらゆる神経組織あらゆる神経組織はことごとく、僕の（からだの）中でびくびくしています。僕はマイスタージンガーの序曲で体験したような持続的なうっとりした感情をついぞ持ったことがありません」と言つて、ヴァーグナーに対する心酔ぶりを綴っている。マイスタージンガーは相当気に入ったと見えて、一八六九年一月二日にドレーズデンでその初日を、更に四月下旬にもカルルスルーエで聞いている。一八六八年一月八日にライプツィヒで当時ライプツィヒ大学のドイツのサンスクリット学者で、ヴァーグナーの姉のオットーリエ（一八一七—一八八三年）の夫でもある、ヘルマン・ブロックハウス教授の家でリヒャルト・ヴァーグナーと初めて会うことになる。その時の様子は

九日付けのエルヴィン・ローデあての手紙にこう記されている。

「家に帰ると、僕は一枚のメモ用紙を見つけました。それは僕あてのもので、次のような短いメモが書かれていました。《君がリヒャルト・ヴァーグナーに面識を得たいのなら、四時十五分前にカフエ・テアトルに來なさい。ヴィンディシユ（より）》

この知らせで僕の頭は混乱し、失礼だけど、僕はたつた今あった（出来）事もことごとく忘れてしまつて、かなりクラクラしたほどだった。

僕はもちろん駆け付け、僕にホットニュースをくれたわれらがビーダー同志を見つけました。ヴァーグナーは極めて厳重に隠密にライプツィヒの彼の親戚のところに身を寄せていました。報道関係に嗅ぎ付けられることはなかったし、ブロックハウス家の使用人はすべて、リブレの墓のように沈黙していました。さて、ヴァーグナーの姉でブロックハウス教授夫人があゝの周知の思慮深い女性で、ヴァーグナーの姉のよきガールフレンドでもある、リツチュル教授夫人のところに、

彼女（ヴァーグナーの姉）の弟（ヴァーグナー）を連れてきました。その際彼女（ヴァーグナーの姉）はプライドをもつて弟の前でリッチュル教授夫人を自慢し、リッチュル教授夫人の前で自分の弟を自慢しておりました。……ヴァーグナーはリッチュル夫人の居るところで傑作（マイスタージンガー）の歌を演奏しました。その曲はもちろん君も知っている曲だ。その後でこの良き夫人は彼（ヴァーグナー）に彼女にとつてはこのリートはもうよく知っている曲で、傑作ですと言ったのです。ヴァーグナーに見えた喜びと訝しげな様子。それはぜひ僕をひそかに知りたいという意志を表明したんだ。……」

ニーチェはこの時には、ヴァーグナーが散歩に出かけて不在だったので、日曜日の晩の招待を受けたことや自分の服装のことを述べている。パーティに招かれるかもしれないという意見にしたがって、服を仕立てたことやその服がヴァーグナーとの会合の日によつと間に合ったことなどが書かれているが、その後でヴァーグナーとの面識を次のように描いている。

「僕たちはブロックハウス家の極めて居心地の良い居間に到着しました。そこには極めて親密な家族の方々とリヒャルト（ヴァーグナー）と僕たち二人以外は誰もおりませんでした。僕はリヒャルトに紹介され、彼（ヴァーグナー）に二こと三こと尊敬のこもった言葉を言いました。彼は僕がどのようにして彼の音楽を知ったようになったのか、尋ねてから、有名なミュンヘンの公演を除いて彼のオペラのあらゆる上演をひどく罵倒したのです。それから、『お集りの皆さん、さあ夢中になろう』とか『諸君、もう少し熱中しようや』と甘い調子でオーケストラに呼びかける指揮者たちをからかうのです。W（ヴァーグナー）はライブツィヒの方言をまねるのがとても好きなんだ。……」

ここで僕は君に手短かにこの晩僕たちに行なわれたことをお話ししよう。それはほんとうに真にすばらしい喜びであつて、僕は今日もなお常態にもどらず、親愛な友よ、君に語り、『不思議な話』を知らせる以上に良い方法を成し得ないのだ。

食前に食後にヴァーグナーは演奏したが、それも、彼はあらゆる声をまねて、それも大はしやぎしなが

ら、マイスタージンガーの重要な場面をことごとく演じたのです。彼は、つまり、とてつもなく活発で気性の激しい人で、非常に早口に語り、非常に機知に富み、極めてプライベートなこの種の集いを完全に華やかなものにするのです。その間、僕は彼とショウペンハウアについて比較的長く話し合いました。まあ、君にはわかつてもらえらると思うが、ヴァーグナーが全く筆舌に尽くしがたい暖かさで僕がショウペンハウアについて話すのを聞いてくれたことは、僕にとってなんという喜びだったことか。ヴァーグナーはショウペンハウアを、音楽の本質を認識した唯一の哲学者であるというふうに語って、感謝の気持ちさえ示していました。それから、ヴァーグナーは現在大学の教授たちがショウペンハウアをどんなふうに取り扱っているかを述べ、ブラーハで開催された哲学者会議についてひどく嘲笑し、『哲学の召人たち』について話したのです。

……

最後に僕たち二人が辞去しようとする、彼（ヴァーグナー）は非常に暖かく僕の手を握り、音楽と哲学を勉強する為に、彼（ヴァーグナー）を訪ねるよう、

非常に心を込めて僕を招待したのです。彼は、彼の姉や彼の親戚に自分（ヴァーグナー）の音楽に関する知識を与えることさえ僕に任せたのです。……⁽⁸⁾」

ヴァインディシユの知らせで気も狂わんばかりの喜びようだったニーチェがヴァーグナーとの会合では客観的に会合の状況を記するほど冷静になっているが、これはニーチェが自信をもってヴァーグナーを囲む会合に臨んでいたことを示すものであって、この時期にニーチェはすでにヴァーグナーに取り込まれながら、ヴァーグナーを内から客観的に距離を置いて冷静に見る傾向を持っていたと言える。ここで述べられているヴァーグナーの心の変動の激しさやその人柄や身振りは後年の『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』に取り上げられている。ヴァーグナーの心的傾向を簡潔に生き生きと描写するニーチェの表現力は、若いながら、ニーチェが文章表現に並々ならぬ才能を持つていることを示している。この表現力とヴァーグナーの中に入りながら、その内よりヴァーグナーをじっと見つめるニーチェの傾向は両者のその後の関係にさまざまな波紋を投げつけるのであった。

その半年後の一八六九年四月一九日にニーチェはスイスのバーゼルに着き、二四歳で恩師リッチュル教授の推薦でバーゼル大学員外教授として活動を始め、同時にヴァーグナーとのスイスでの交友も始まることになる。

バーゼルに来て四週間後の一八六九年五月一七日にルツェルン郊外のトリープシエンにあるヴァーグナー邸に初めてヴァーグナーと後にヴァーグナー夫人となるコジマ・フォン・ビューローを訪ねている。それ以後、しばしばニーチェはヴァーグナーと会っているが、そうしたヴァーグナーとの交友関係から得たニーチェのヴァーグナー像は、「シヨウベンハウアが『天才』と呼んだものの化身」、「ヴァーグナーの中で主調をなしているものは、一種の、はなはだ絶対的な理想」、「深く人の心を揺さぶる人間性」、「高貴な生命の気高さ」、「現代最大の天才、偉大な人間」などであった。ニーチェはヴァーグナーから神的なものの近くにいるような印象を受けていたのであった。ニーチェは一八七三年五月二〇日のヴァーグナーに対する手紙の中で、もしヴァーグナーに会わなかったら、自分の人生は真に生きるに値しないだろうとも言っている。ニーチェは自らの哲学上、倫理上、学問研究上の目標を、ヴァーグナーのように、

自らがひとつの総体になることに置いているとも言っている。分野は違っても、ニーチェはヴァーグナーの中に変革を求めて止まぬ天才の燃えるような力が、時代のすべてを自己の芸術の中に統合しようとするのを感じとっていたのであり、そこに自らの精神の指導者を見、自らもそうなることを目指していたのである。

ニーチェとヴァーグナーとの前述した交友関係によるニーチェへの影響は単にニーチェの人間形成の面のみ留まるものではなかった。ニーチェの思想にも及んでいる。

ニーチェはヴァーグナーから一八七〇年に公けにされた『ベートーヴェン』の原稿を送られてひどく感激しているが、その感激を幼な友だちのカルル・フォン・ゲルスドルフに一八七〇年十一月七日にこう書き送っている。

「ヴァーグナーは僕に数日前にすばらしい原稿を送ってきました。『ベートーヴェン』というタイトルです。ここには徹底的にシヨウベンハウアに基づいた、極めて深い音楽の哲学があります。この作品はベートーヴェンをほめたたえているように思えます。——国家がベートーヴェンに示し得る最高の榮譽として。……」

更に一二月一二日付けの手紙には、

「僕から送る『ベートーヴェン』に関するヴァーグナーの最近作を、ある旗のもとでわれわれが努力と思考を内的に共有するシンボルとしてお納めください。その旗とはただ目標に導くものとしてヴァーグナーがこの書の中に指し示しているものです。僕はこの最近作を感謝と畏敬の念に満ちた気持で読みました。音楽それ自体がこの最高の表現の中で表わされている様は、この書の中にあるさまざまな神秘のひとつであり、美しくも驚くべきものです。」⁽¹²⁾

ニーチェはヴァーグナーの『ベートーヴェン』に「徹底的にショウペンハウアに基づいた極めて深い音楽の哲学」を、あるいは「ショウペンハウアの精神とヴァーグナーのエネルギー」が込められている哲学（ローデあての手紙⁽¹³⁾）を見ており、そこにニーチェがこの書に傾倒するゆえんでもある。ローデにはこの書を読めとまで言っている。ニーチェには「この書は僕たちが⁽¹⁴⁾僕たちが！——未来において生きるであろう精神の啓示」に見えたのである。

ところで、ヴァーグナーに対するニーチェの傾倒ぶりはニーチェの作品にいろいろな見解を生む原因になっている。例えば、「悲劇の誕生は細部に至るまでヴァーグナーの理論的な諸作品、とりわけ、オペラとドラマ（一八五二年）とベートーヴェン（二八七〇年）に影響されている」という見解が生まれもしている。実際、ニーチェの『悲劇の誕生』はニーチェとヴァーグナーとの交友関係から生じたものであるが、それだけに一八七二年四月二二―二四日にヴァーグナーがトリープシエンを去ってバイロイトに移住することになった時、ニーチェはなんとも言えぬむなしさを感じている。ニーチェは同じ年の四月二三日にトリープシエンに最後の訪問をし、その時の自らの心境をゲルスドルフやローデに書き送っている。

「トリープシエンは今日をもって終りです。まるで音を立てて崩壊している中のように、僕はその地でなお数日間憂うつな日々を過ごしました。僕たちは君についていろいろ話し合いましたし、君の『深い意味のある感動的な数々の手紙』についても僕に伝えられました。ほんのわずかでも暇があれば、すぐにW（ヴ

「アーグナー」は君におたよりを差し上げることになっています。彼は君に僕を通して彼が君にどんなに感謝しているかをことずかつております。また、君に五月二十二日にバイロイトへ来るようにという、彼の招待に応じるように願っております。君は事情をよく知っていることだし、この仲間とのつき合いも長いことだし、きつと心から出席してくれるものと思っています。ああ、なんとすばらしい生活が、今この中心から（バイロイトへ）動き出したのだろう。」⁽¹⁶⁾

「先週の土曜日はトリープシエンと悲しくも深く心を動かす別れでありました。トリープシエンは今や活動を止めてしまいました。からからと音を立てて崩れゆく中で僕たちは徘徊しておりました。心を揺さぶることは、どこにでもありました。空気の中に、雲の中に、犬はむさぼり食うことはせず、家のお手伝いさんたちは、言葉を交すと、すすり泣くばかりでした。僕たちは原稿や手紙や本をまとめて包装しました。——ああ、それはなんとわびしいことであつたらう。この三年間、その間僕はトリープシエンの近くで過ごし、二、三回

その地を訪ねたのですが、——その年月は僕にとつてなにを意味しているのだろう。その年月が僕になかったら、僕はどうなつていたろう！僕は幸いにも僕の本の中に自分でトリープシエンの世界を化石化しておきました。」⁽¹⁷⁾

ゲルスドルフの手紙にあるように、ニーチェとヴァーグナーとの熱き交友関係は、ヴァーグナー家がトリープシエンを去った時点で終り、以後両者の関係は冷えていくことになる。ニーチェの『悲劇の誕生』はヴァーグナーとの交友関係を抜きにしては生じなかつたのであり、それ故にこそ、ニーチェは一八七二年に『悲劇の誕生』の中にヴァーグナーとの交友関係を「化石化」したと記すほどの心境であつた。

こう見ると、『悲劇の誕生』に対するヴァーグナー自身の理論的な論述の影響は過小評価すべきでない⁽¹⁸⁾が、しかし、どこまでがヴァーグナーの部分で、どこまでがニーチェの作品かは区別できないところに、『悲劇の誕生』の特徴がある。そういう意味で『悲劇の誕生』はニーチェとヴァーグナーとの交友関係が良好な時期の所産と言うことが

できる。ここで混同されてならないことは、『悲劇の誕生』はあくまでもニーチェ自らが書いた作品であつて、どんなにヴァーグナーの影響を受けようとも、ニーチェが古代ギリシャ悲劇を基本に据えながら、シヨウペンハウアの哲学とヴァーグナーの楽劇を取り込んで、自らの芸術観を表出したことには変りはない。その限りにおいてこの作品は、ヴァーグナーの影響がどんなに強力であつても、まぎれもないニーチェの作品であつて、ヴァーグナーの作品の改作ではなく、ニーチェ自身の作品である。この頃に属するニーチェの作品には、『ギリシャの楽劇』(Das griechische Musikrama, 一八七〇年)、『ソークラテースと悲劇』(Sokrates und die Tragodie, 一八七〇年)、それに『悲劇の思想の誕生』(Die Geburt des tragischen Gedankens, 一八七〇年)などがあるが、いずれもヴァーグナーとの交友関係が良好だった頃の作品であるが、それらを含めて若きニーチェの前半の所産であつた。

(二) ニーチェとバイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー

ニーチェは、このように、ヴァーグナーに限りなく敬慕

し感服し献身しているが、他方、一八六八年にヴァーグナーと邂逅する前に、ヴァーグナーの音楽を聞いて、その音楽の本質に『タンホイザー』や『ローエングリン』や『トリスタンとイゾルデ』に漂う雰囲気に直観的に脆弱や退廃性を、あるいは、ヴァーグナーにディレッタンティズムさえ感じている。

ニーチェは一八六九年九月二八日付けの幼な友達のゲルズドルフ宛ての手紙にヴァーグナーとの間に生じたちよつとしたあつれきを次のように手紙に書き送っている。

コジマ・ヴァーグナーの日記によると、ことの起りは、ニーチェが肉を食せず素食する誓いを立てたことに対してヴァーグナーがひどく腹を立てたことにある。ニーチェは宗教的な理由からも動物を食しないと云つたのに対して、ヴァーグナーは「われわれの全存在は一種の妥協であつて、なにか良いことをすることによってその妥協を償い得るのだ」と答えたが、そのことについてニーチェは次のように書いている。

「ヴァーグナーは自分の心情をはなはだ暖かく込めないのでなく、しかし、ひどく激しい口調で僕にあの

理論と実践をことごとく内的に変えることを弁じたのです。僕にとって重要なことは、ここでもまたあの楽天主義の部分が明白であったことだ。その楽天主義はなほだおかしな形式をまとして、時には社会主義として、時には火葬として、——埋葬ではない、時には食物性食品論としてなど、さまざまな衣をまとして再三再四姿を現わすのだ。まるで、つまり、神のおきてに背く非自然的な現象を取り除くことで幸福と調和は作られるとも言わんばかりだ。他方では、われわれの高貴な哲学は、われわれがつかもうとするとそこはどこでも、一方では完全な滅亡を、他方では生きんとする純粹な意志を捕え、そこではいかなる一時的ななぐさめも無意味であることを教えている。同様に、僕にとつてはつきりしていることは、肉を一時的に節制することは、食養生法の理由からはなほだ良いことだということです。……」⁽²⁰⁾

この手紙にはニーチェが肉食を節制している理由が、ひとつは「われわれの高貴な哲学」、つまり、ショウペンハウアの哲学に基づく信条にあり、他が「食養生法」、つま

り、ニーチェの健康上の理由にあることを示しており、それをヴァーグナーは理解せず、自己の主義主張からニーチェの食事習慣を変えようとしていたことがわかる。ニーチェはヴァーグナーの論法にヴァーグナーに潜む楽天主義を、ヴァーグナーと知り合うようになった頃にすでに見ている。ニーチェの目に映じたヴァーグナーは、ペシミステイックなショウペンハウアの哲学を唯一の哲学と称しながら、他方ではそれと相反する楽天主義的な生活を営む人のように見えたのである。そして、その矛盾は少しずつニーチェの心の中で拡大してゆき、ついには一八七八年の訣別となつていったと見られる。ニーチェのヴァーグナー像はもともと一方に心から敬服してやまぬ面と、他方には抵抗せざるを得ない面とを内包していたのである。こう見るなら、「関係している人たちにはまだ気づかれなかったが、(ヴァーグナーからニーチェの) 離反は、すでに(交友関係の始まった) 初期に兆しが見えはじめていた」と言える。⁽²¹⁾

ヴァーグナーとニーチェとの間に生じた確執は一八七三年三月二日のゲルスドルフあての手紙にも「なんとしばしば僕は師匠に不快を与えたことであろう。僕はその度にあらためていぶかりはするが、その原因が実際どこにあるの

かを探り当てることは、全くできないでいます」⁽²²⁾と記されている。この手紙はニーチェがヴァーグナーとの交友関係が生じて、ヴァーグナーに信託していた一八七二年以前にすでにヴァーグナーの言動にいぶかしい眼差しを向けていたことを示している。この手紙でこのくだりの後でニーチェは「度重なるこの軋轢について君の意見を聞かせてください。どのようにして人が、W（ヴァーグナー）にあらゆる主要なことに於いて僕が行ってきた以上に誠実を行い、より深く献身し得るのか、僕には全く思いつかないのです。もし僕がそれを思いつくことができたなら、僕は以前以上にそれを行うでしょう」と訴えているが、これはヴァーグナーがニーチェにニーチェの為し得ないほどの過大な献身を求めていたことを示すものであって、そのヴァーグナーの要求の前に、ニーチェがただおろおろするばかりであった心境が吐露されている。さらに、次のようにもニーチェは同じ手紙に記している。

「しかし、取るに足らぬ副次的な問題点に、あるいは、ある種の、僕に必要なほど『健康上（の理由）』とも言える……節制にも僕は自由を守らねばならないの

です。それについては、もちろん、ひとことも言っているわけではないのですが、しかし、感じるのは、そして、それが不機嫌や不信や沈黙を生ぜしめる時などは、いてもたってもいらぬ気持ちになります。僕は今度などもこんな激しい不快を与えたふしなど全く考えられないのです。僕はだんだんそのような体験でいま以上に不安になることを恐れるのです。——どうか、親愛なる友よ、君の率直な意見を聞かせてください。」⁽²³⁾

ここで述べている「健康上」の理由でニーチェが個人的に食事に関して節制していることは、一八六九年九月二八日付けのゲルスドルフあての手紙にも述べられているが、その時にヴァーグナーが自分の考えを述べて、ニーチェのこの節制を変えさせようとしたが、ニーチェが従わなかったで、不機嫌になった由、書いているが、そのことが四年後にも再び同じゲルスドルフに嘆いているところに、ヴァーグナーのしつこい性格が現われている。その上、自らは誠心誠意勤めているにもかかわらず、原因不明の「激しい不快」に見られる感情の爆発にさらされるニーチェの

戸惑が目に見えるようである。

こう見ると、ヴァーグナーとの間に生ずる軋轢の原因をニーチェはヴァーグナーそれ自身に見出しているのがわかる。ニーチェはそれを一八七四年七月四日付けのゲルスドルフあての手紙にも「バイロイトとは目下のところ良い意図以上には進展しておりません。つまり、彼らは自分の家や生活を安定させていないし、したがって、現時点では僕たちの（バイロイト）訪問は適当ではないと思っています」と言つて、ニーチェサイドでバイロイト訪問を見合せている理由が述べられている。ヴァーグナー一家は一八七四年四月二八日にバイロイトの終生の住家、ヴァーンフリート（Wahnfried）に引越している。ニーチェは「去年二回、一昨年にも二回バイロイトで（ヴァーグナーに）お会いしているのに」と言つて、その時点でバイロイトにおけるヴァーグナー一家の生活状況を知っており、したがって、現時点でヴァーグナー家を訪ねることは、ヴァーグナーに迷惑をかけるものと、ニーチェが配慮しているのが読み取れる。その上で、ヴァーグナーをバイロイトに訪問することを思いとどまっていたのだが、ヴァーグナーはそれがしやくの種になったようである。ニーチェはその後で「それはそう

として、僕のバイロイト訪問を、一種の脅迫する態度で無理強いしようとするばかりしい発想を、親愛なる友よ、君はどう思う？ その発想は、まるで僕が自ら進んでバーゼルからかの地に行きたくないかのようにさえ思えるだ」と言つてゐる。善意をもつてニーチェがバイロイト訪問を見合わせてゐる真意を、ヴァーグナーは全く理解せず、バーゼルとバイロイトの距離ほどにニーチェとの交友関係が疎縁になつたように捕えていたのである。ニーチェはそうした「ヴァーグナーの性質がはなだ不信の念を起こしがちなを知っており、その不信感をなお一層⁽²⁵⁾あおりたてようとは、思わなかつた。」のである。ニーチェがヴァーグナーとの交友関係で最も恐れた最大の理由が、ヴァーグナーの性質のひとつである、自分のわがままな要求がいれられない時の、この、人に対する「不信の念を起こす」ことであつた。ニーチェの健康はこの時期はひどく悪かつたが、それもバイロイトに行けなかつた理由のひとつにある。ニーチェは一八七四年八月中旬にバイロイトにヴァーグナーを訪ねているが、その時、ニーチェはブラームスの曲を弾いて、ブラームス嫌いのヴァーグナーにかんしやくを起こさせたり、ヴァーグナーとの間に少なからぬ軋轢を起こし

ていた。コジマの日記の一四日(金)の項に「ニーチェ教授はリヒャルトとかなりの時間重苦しいやりとりがあった後、昼間立ち去った」と記している。⁽²⁶⁾

いずれにしろ、大学の仕事の制約と自らの健康上の理由と過大なヴァーグナーの諸要求とそれを為し得ぬことによつて生ずるであろう、ニーチェに対するヴァーグナーの「不信の念」に対する恐れとの間で、ニーチェのヴァーグナー熱は、ヴァーグナーに対する深い敬愛の情を抱きながら、少しずつ冷えていったのである。

『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』はニーチェとヴァーグナーとの交友関係に生じた前述した軋轢を背景にしながら、一八七五年秋から一八七六年の春にかけて、頭痛や胃痛や眼痛などの持病の激しい発作に悩まされながら、完成されたものである。敢えて言うなら、ヴァーグナーの援助なしに自らの考えを自らの力で書きあげた書が『反時代的考察、第四部、バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』である。この書が書かれた頃にニーチェはこの考察についてローデに、ニーチェのこの考察が「自分に要求してきたものにはるかに及びません。この考察はわれわれ(ニーチェとヴァーグナー)のこれまでの体験

のうちで得た最も重要な点について新しい方向を示すという意味を持つてはいますが、それを越えてはいません。僕自身がこの方向を完全に成功しているわけではないことを知っています」と言つて、ニーチェがこの考察をするにあつて、自分に課した「要求」があつたことを述べている。その課題こそヴァーグナー芸術を凝視し、その芸術の持つ本質を探り出すことにほかならなかつた。

ニーチェは一八七六年五月二日にヴァーグナーにその誕生日を祝して手紙を送つて、七年前にヴァーグナーとお会ひして以来ずっと「あなたに僕の中に生き続け、それ以前には僕に全然なかつた、全く新しい血として絶え間なく作用しつづけてきました」と述べているが、これはニーチェが七年間ヴァーグナーに取り込まれながら、その内側よりヴァーグナー芸術の本質を見つめつづけ、ヴァーグナー芸術の本質を追求してきたことを示すものである。一八七四年の夏以来、ヴァーグナーとの交渉は手紙によるもので、会つてはいない。言うなれば、ニーチェはヴァーグナーとの交際を断つて、自分だけで静かに七年間ヴァーグナー芸術を見つづけてきたものを『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』に総決算したと言える。その総決算は

この書ではそれまでにないほどのヴァーグナー分析に満ちており、その分析には後年のアンチヴァーグナーとしてのヴァーグナー批判がすでに含まれている。それ故、ニーチェはこの書を印刷するのにひどくためらっていたが、弟子のペーター・ガストの勧めもあって、ついに一八七七年第一回バイロイト祝祭公演の始まる数週間前に出版し、一八七六年七月にヴァーグナーに献本している。その添え状に当時のニーチェの複雑な心境が綴られている。

「……これは一種のバイロイト祝祭の説教です。……あなたご自身がこの告白をどのように受け取られるか、僕はこんどは全く予測できません。僕の著述はそもそも困った結果を自分にもたらすことがあり、その結果、僕が作品を公表する度に、僕の対人関係になんらかの疑念が生じ、ともかくも、心を尽して修復せざるを得ません。僕が今日これをどの程度、とりわけ、感じているかは、全くはつきりと申し上げることができません。僕が今度なにを敢えてしようとしていたかを考えると、僕は後で目まいがして、氣力を失い、ポーデン湖の湖面を渡る騎士のような気分になります。

もし僕がほんの少しでもあなたについて異なった考えを書いているとしたら、僕はこの書を公にすることはなかったと思います。しかし、あなたは僕にかつて僕に愛した最初の手紙でドイツの解放に対する信仰について話されました。

この信仰のお陰で僕は今日次のように申し上げます。どんなに僕がこの信仰からのみ、自分がかつて為したことを為す勇氣を見出し得たかを。」

ニーチェはここで自分の欠点の一般論を展開しているように書いているけれど、実際はヴァーグナーに向けられていて、その真意は、もし師匠であるヴァーグナーのお氣に障るところがあるとすれば、それはすべてニーチェの文才のなさによるものであって、そのことを考えると、とかく筆も鈍りがちであるが、にもかかわらず、この書をニーチェをして書かせたのは、ひとえに師匠がかつて自分あての手紙に書かれた「ドイツの解放」にあり、その師匠の手紙があつたればこそ、今日の『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』があると云うものであつた。

この書は表面的にはヴァーグナー賛美に見えるが、本質

はニーチェがヴァーグナーから離反して自立する陣痛の書であつた。それを見抜いた人は幼な友達のゲルスドルフである。彼はニーチェより『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』を贈られた返事にそれを述べている。

「……昨日（一八七六年七月一日）の午後ケムニツのスタンプの付いた灰色の包みからこの本が僕の前に現れた時は、たいへんびっくりしました。正直言つて、僕は君と共に、君の為に、君がこの重荷を成し遂げて、気持ちを軽くされる力を見出したことを心から喜ぶものです。……僕の場合に訴える真の言葉に深く心を打たれます。……君自身で書いた完璧な一篇を君は（他の作品とは）異にして、全身全霊を込めて書き、表現不可能と思われるものを表現し、最も内面的な魂を、最も誠実な感情を最も共通した世界に真実のこもった、敬虔で強力な証拠として示しています。」

ゲルスドルフはニーチェから贈られた本を読み、そこに現実のヴァーグナーとは異なるヴァーグナー像を読み取つたに違いない。ゲルスドルフのこの手紙に対する返事でニ

ーチェは「君は僕が考えていた人よりも実際はものを聡明にわかるのですね。——この本は（ヴァーグナーに）認知されました。僕はそれを考えると、ほつとしています。W（ヴァーグナー）は『友よ！ あなたの本はものすごい。あなたはいつどこでわたくしについてこのような知識を手に入れたのですか？』ヴァーグナー夫人とヤーコプ・ブルクハルトも証明しております」ニーチェがどんなに重苦しい心境で『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』を書いていたか、想像される。

ニーチェは一八七六年七月二二日、体調すぐれぬまま、バイロイトに出発し、二三日到着し、七月二四日―二六日にかけて『神々のたそがれ』試演に出席、七月二七日『フアンタジー』離宮に出かけ、七月三一日『ヴァルキューレ』の試演に出席している。八月四日には祝祭公演出席に耐えられず、自分の席を他人に譲つて、一人南独バーメン森の南西部の山地にあるバイエルン森のクリンゲンブルンに旅立ち、ヴァーグナーの不快を買っている。八月一日付けの妹のエリーザベトにあてた手紙には、当時のニーチェの様子が生々しく伝えられている。

「からだの調子がよくないんだ。……絶え間ない頭痛、まだ最悪という状態じゃないけど。それにかつたるいんだ。きのうはヴァルキューレを暗いホールで聴くことができたけど、バイロイト祝祭の上演全部を見ることなんて不可能だよ。よそに行きたいよ。このまま居つづけるなんて、はなはだばかばかしい。毎晩こんなに長い芸術とつき合うなんて、ぞつとするよ。でも（ここに居れば）行かないわけにもいかないしね。

こんな窮状だからお願いがあるんだ。パウムガルトナー家の人と相談してください。ご母堂とご子息に第二回上演シリーズの八枚の入場券を、全部で一〇〇タールで譲ってやるって、……僕はうんざりしているんだ。第一回の上演にも僕は出たくない。どこか別のところに居たいんだ。ここじゃない。ここは僕には苦悩以外なものない。できたら、おまえがシュマイツナーに第一回上演（シリーズ）の僕の席を彼にあげる旨、ちよつぴり手紙を書いてくれ。それとも、おまえが望むなら、誰か他の人に、たとえばパッホーフフェン夫人にあげてもいいよ。またもおまえに僕の為にいろいろ苦勞をかけてすまないね。僕はフィヒテル山脈か、

さもなかったら、どこかに行きたいね。」⁽³¹⁾

八月六日にもニーチェは自分の健康状態と精神状況をバイロイトに居る妹に次のような手紙を出している。

「……僕はそこ（バイロイト）ではがまんできないことは、よく知っているんだ。本来なら、前もってそのことを知っておくべきだったんだがね。僕がどんなに注意深くこれまで生活してこなければならなかったか、去年のことだけでも考えてくれ。僕は短い間でもそこ（バイロイト）に滞在すると、じきにはなはだ疲労困憊するのを感じるんだ。もう自分というものが取り戻せないんだ。天気の良い日が一日だけ（ここ（クリンゲンブルン））にあつて、寝ていたよ。でも、時折バールゼルであつたような頭痛が絶えずあるんだ。この地はとてもいいよ。深い森林にさわやかな空気、（ローヌ川からライン川に及ぶ褶曲山脈の）ジュラ（地方）にいるようだ。ここに留まっていたいね。十日ぐらい。でも、二度とバイロイトには帰らない。第一金欠だしね。それじゃ、今年は多分再会はないと思う。……僕は、

この夏の全くの幻滅に耐える為にできる限り心の平静を取りもどさなければならぬ。僕は友とも会わないだろう。なにもかも、今は僕にとつては毒薬であり、⁽³²⁾障害だ。」

この手紙を見ると、ニーチェは単にバイロイトの祝祭公演の長さに健康状態から耐えられなくなったのではなく、精神的にもヴァーグナーの芸術との付き合いにあきあきしていたことが述べられている。ニーチェは七年間にヴァーグナーの表と裏を知り尽していて、その裏の面が一八七六年のバイロイト祝祭公演であふれ出たものと見られる。

しかし、ニーチェは『ニーベルングの指環』の第一部『ラインの黄金』初演の前日(八月六日)に妹の脅迫にも強い強要で、やむなくバイロイトに帰ってきているが、八月二七日、祝祭公演終了の前日にまた、バイロイトを去っている。バイロイトに再度帰ってきた時のニーチェの心境をパリに住む知人(Frau Louise Ott)に書き送っている。

「あなたがバイロイトを去った時、わたくしの周りは一闇でした。まるで誰かが光をわたくしから奪い取った

かのように思えました。わたくしはまずは落着きを取り戻さなければなりませんでした。でも、わたくしはもう平静を取り戻しましたので、心配せずにこの手紙をお手元にお収めください。⁽³³⁾」

バイロイトに引き戻された後のニーチェは、ヴァーグナーとは気まずくなり、妹にも話を通せず、唯一話し合える人はパリに去り、周囲に心の通じ合う人が一人も居ず、暗澹とした気持でいたことが述べられている。「わたくしはまずは落着きを取り戻さねばなりませんでした」にバイロイトに連れ戻されたニーチェの精神状況が現わされている。ヴァーグナーとの交友関係は、この時点で破綻したものである。

同年十月二七日にイタリアのソレントに宿を取ったニーチェは、その夕方十月五日以来ソレントにいたヴァーグナー一家を訪ねている。そのことをコジマは十月二七日(金)の日記に「マルヴダー(フォン・マイゼンブーク)とDr. レーとわれらが友、ニーチェ、来訪。ニーチェ、非常に疲れていた。彼の健康と非常に関係あり。」と記し、十一月二日(木)の項に「夕方、われわれはわれらが友、マルヴィー

ダとニーチェ教授と過す⁽³⁵⁾」とのみ記されている。その間にマルヴィーダ・フォン・マイゼンブルークやDr.レーについては書いてあっても、ニーチェの名は書かれていない。ヴァーグナー一家は十一月七日にソレントを、マルヴィーダと共に去ったとコジマの日記には記されている。⁽³⁶⁾これ以後ニーチェとヴァーグナーとは会った徴候がない。そして、運命の訣別の日が一八七八年に訪れたのである。

こう見ると、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』は、ニーチェがヴァーグナーとの交友関係を清算して、自立への道を歩み出す出発点と言える。したがって、そこにはニーチェが七年間の交友関係を通してヴァーグナーに見た芸術に関するニーチェの基本的な見解が、陰と陽の部分として織り込まれている。そして、その陽つまり肯定できる部分は、両者の交友関係が良好だった時代の作品である『悲劇の誕生』の基本的な潮流でもあった。ただ、両者の違いは、『悲劇の誕生』ではその主要な舞台が古代ギリシャ時代に置かれていたのに対して、『バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー』ではリヒャルト・ヴァーグナーという十九世紀最大の芸術家の一人に置かれていることである。敢えて言うなら、十九世紀最大の芸術家に

見出し出した芸術に関する諸問題を、ニーチェは古代ギリシャ時代にその解決を見出したのである。その意味で両者は不即不離の関係にあると言える。(つづく)

〔注〕

- (1) Friedrich Nietzsche : Werke in drei Bänden. Hanser, München, 1956, Bd. I S. 118.
- (2) Ebenda S. 408.
- (3) Ebenda S. 370
- (4) Friedrich Nietzsche : Werke. Kritische Gesamtausgabe, de Gruyter, Berlin & New York, 1978, Bd. III, (32), (20)
- (5) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe, Briefe, Beck, München, 1938, Bd. I, S. 171.
- (6) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe, Briefe, Beck, München, 1938, Bd. 2, S. 259.
- (7) Ebenda S. 265 ff.
- (8) Ebenda S. 267 ff.
- (9) Ebenda S. 347.

- (10) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1942, Bd. 4, S. 7.
- (11) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1940, Bd. 3, S. 83 ff.
- (12) Ebenda S. 90.
- (13) Ebenda S. 88.
- (14) Ebenda S. 95.
- (15) Ulrich Müller und Peter Wapnewski : Richard-Wagner-Handbuch. Kröner, Stuttgart, 1986, S. 117.
- (16) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1940, Bd. 3, S. 231.
- (17) Ebenda S. 235.
- (18) Ulrich Müller und Peter Wapnewski : Richard-Wagner-Handbuch. Kröner, Stuttgart, 1986, S. 118.
- (19) Cosima Wagner : Die Tagebücher. Piper & Co, München/Zürich, 1976, Bd. 1, S. 152.
- (20) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1938, Bd. 2, S. 367, ff.
- (21) Ernst Behler, Wolfgang Müller-Lauter, Heinz Wendel : Nietzsche Studien. de Gruyter, Berlin & New York, 1989, Bd. 18, S. 409.
- (22) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1940, Bd. 3, S. 361, ff. de Gruyter 論註 [den 2. März 1873] に於て
 〆ゝるを Beck 論註 [den 24. Februar 1873] に於て 〆田
 中七郎 論註 〆ゝる。
- (23) Ebenda S. 361.
- (24) 田中七郎の論註。
- (25) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1942, Bd. 4, S. 83.
- (26) Cosima Wagner : Die Tagebücher. Piper & Co, München/Zürich, 1976, Bd. 1, S. 844.
- (27) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München, 1942, Bd. 4, S. 277.
- (28) Ebenda S. 289, ff.
- (29) Karl Schlechta : Die Briefe des Freiherrn Carl von Gers-

dorff an Friedrich Nietzsche. Stephan Geibel & Co., Altdorf, Thür. 1936, III. Teil. S. 49.

- (30) Friedrich Nietzsche : Werke und Briefe. Historisch-Kritische Gesamtausgabe. Briefe. Beck, München. 1942. Bd.

4. S. 293. ff.

- (31) Ebenda S. 296. ff.

- (32) Ebenda S. 298.

- (33) Ebenda S. 299.

- (34) Cosima Wagner : Die Tagebücher. Piper & Co., München/Zürich. 1976. Bd. I. S. 1011.

- (35) Ebenda S. 1012.

- (36) Ebenda S. 1013.